



No. 130 2021. 10. 19

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
明石市教育委員会事務局学校教育課



コミスク TwitterQR

“教育 DX で、子どもたちの学びはどう変わる？”



2021年10月10日「デジタルの日」に、「未来の教室」キャラバン2021が“教育DXで、子どもたちの学びはどう変わる？”をテーマに開催されました。

DX（デジタルトランスフォーメーション）という言葉はいろいろな所でよく耳にしますがまだまだ教育現場には馴染みがないのではと思います。今回の浅野大介室長の基調提案から、デジタル庁に様々な省

庁・民間から人が集まり、これまでの縦割りではなく、横断的に教育イノベーションを創出していこうとしているのだということを感じました。今までの仕組では未来に対応できない、そこで「トランスフォーメーション（生まれ変わり）のためにデジタルを活用する」からDXなのだDXを自分なりに解釈しました。今までの仕組をデジタル化するのではなく、学びの構造・教師の仕事の構造をトランスフォーメーション（生まれ変わり）するためにデジタルを活用するといった視点を持つことが必要なのだと考えます。そんな視点を持つうえでこの動画の中にはいっぱい詰まっているように思います。時間のある時に、少しずつ見ていくことができるのがオンデマンドの良さだと思えます。そんなオンデマンドでの学びを体験し、共有し、対話しながら深めていくことが子どもたちのこれからの学びを考える上でも必要なのではと考えます。学校の中で、そうした教師の学びの輪が広がっていけばいいなと思っています。

「未来の教室」キャラバン2021 “教育DXで、子どもたちの学びはどう変わる？”

<https://www.youtube.com/watch?v=bzljftiu1iw>

“「探究」するまなびをつくる” “ハイ・テック・ハイ”の学びを読み解く

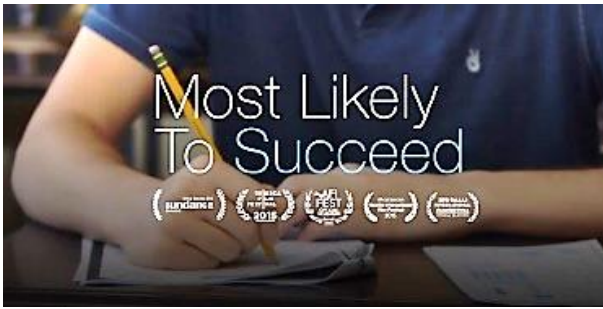
子どもたちのこれからの学びを考える上で、キーワードとなるのが「個別最適化」と「探究」ではと思います。個別最適化された学びと探究的な学びの具現化にチャレンジし注目されているのが「Most Likery to Succeed」の舞台となった“ハイ・テック・ハイ”ではと思います。そんな“ハイ・テック・ハイ”で実践されているPBL(プロジェクト型学習)をわかりやすく読み解いてくれている“「探究」するまなびをつくる”がfacebookで紹介されていたので思わずポチってしまいました。



経済・教育格差が広がるなか、子どもの生きる力を伸ばし、幸せな未来につなげる「探求」する学びをつくるにはどうすればいいのだろうか？

世界屈指のプロジェクト型学習を行う米ハイ・テック・ハイ校は低所得者層の生徒が約半数だが、大学進学率は96%を誇る。その教育プログラムを日本に導入した著者による探究の教科書。

(参照：平凡社 HP 本紹介)



「Most Likery to Succeed」では、アメリカの抱える課題を浮き彫りにしながら、ハイ・テック・ハイ校で実践されているPBLが「今の子供達が大人になるときに、イキイキと活躍するためには、どの様な学びの環境が必要なのか？」と私たちに問いかけながら紹介されています。

10月10日の神戸新聞朝刊に「導入20年総合学習の役割は？」という記事がありました

た。導入20年を経て、ようやく総合的な学習の時間の本質に光があたるようになってきたと感じています。総合的な学習の時間は導入後、“這いまわる経験主義”“活動あって学びなし”と子どもたちには学力が身につかないと批判を受けたりしてきました。今まさしく「今の子どもたちが大人になるときに、イキイキと活躍するためには、どの様な学びの環境が必要なのか？」といった視点で“個別最適化された学び”と“探究的な学び”が実現する学びの環境を創っていくことが求められているのだと思います。

教師自身や保護者も含め我々大人は我々自身が必要とされてきた学力としての認知能力に軸足を置いて考えてしまいがちになります。1986年の中教審答申で「生きる力」が打ちだされてから30年以上学習指導要領には「生きる力」が掲げられてきました。そして、今回の学習指導要領には前文が設けられ、「一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とこれから必要な資質・能力として認知面だけでなく、非認知面を育てていくことの必要性が打ちだされています。「探究する学びをつくる」の中では新学習指導要領が求めている学びは、“ハイ・テック・ハイのような学びでは”と投げかけられています。未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力を子どもたちに育てていく学びのあり方を、教育DXとつなげながらこの本をヒントに「プロジェクト型学習っていったい何？」といったところから対話を始めてみるのはいかがでしょうか。そうした対話が今求められている「社会に開かれた教育課程」の実現させるカリキュラム・マネジメントの本質につながっていくのではと考えます。

非認知能力の対話を始める参考に



未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力として認知能力だけでなく非認知能力を考える上で違った視点で考えてみるきっかけになるのがこの本ではと思います。日本でも非認知能力を育む環境に目を向けた取組がふえてきています。その一つが軽井沢風越学園です。ホームページをみると「大切にしたいこと」として次のように書かれています。

“赤ちゃんは、たくさんの愛情を受け、身の回りのいろいろなものに関心を向けながら、まずは一人遊びをたっぷり楽しみます。豊かな一人遊びの時間を積み重ね、誰かと一緒に遊ぶことの楽しさを知ります。そして、遊びに応じていろいろな人と関わりを持ちます。そうすることで、他者や世界に興味・関心を持ち、学んでいくのです。”

どんな子どもにも幸せな子ども時代を過ごしてほしい。遊びが学びへとつながっていく、この人間の自然な育ちを大切にしたい学校をつくりたい。”

“そんな遊びが学びへとつながっていく”過程がこの本を読むとイメージできるのではと思います。非認知能力を育む環境づくりに向けての対話が校種の壁を超えてはじまればよいなと思っています。

(文責：北本)